

## 2000 蓼科旅行

7月17日（月）晴□

夏である。嗣郎さん宅に悔みに行く。膵臓ガンは三か月とか、言葉もない。孝子さんは医者いらずの人生だったらしいが、何とも虚しいではないか。ここから教訓など引出すことさ虚しい。□

片付けを続ける。今日はイギリスへ送る写真を選んだ。五〇枚ほどになる。概して言えば旅行の概要をよく表している。フィルムは二四枚を一〇本、三六枚を五本で、二五〇たす一八〇で四三〇駒一八日だから平均24駒/日となる。□

五一、四キロ、四〇〇〇歩□

7月18日（火）晴□

夏である。英国関係を早く始末したいと思ったが写真の追加注文が出来なかった。今日から旅行の出来ことを紀行という形で広くまとめ始める。最初は第一日だけ。□

CDを作曲別に整理してみようと思立った。安価大量買いをした結果である。ハイドンやシューベルトがないようだ。午後は眠ってしまった。夜の巨人阪神戦が久しぶりに面白い試合をやっていた。尤もBSなので、見続けたことにもよる。延長で9対7、巨人が勝つ。□

7月19日（水）晴□

学期末である。子供の姿を見ながら複十字病院を往復する。2時間待ちで3分診療、尾形先生との対話時間を加えてである。□

午後は寝ってしまった。いつまでたっても、1枚250円（8枚2200円）のバッハカンタータが終わりまで聞けない。□

7月20日（木）晴□



蓼科旅行に出る。三度目である。勿論蓮江夫妻と一緒に、久子夫人の実家の岡本山荘を借りる。我らの歳のほか、一年の間に変化があった。茅野の駅の岡島というデパートが潰れた。誠に地方のデパートを地で行く飾りつけだった。空虚を予想したが、予想外、経営者が変わって都会なみの商品

が賑々しく展示されていた。地のものが消えた感じがする。□

山荘の隣が立て替えとか、それに今年は数日の遅れで、避暑の盛りに入ったせいか、車はやたらと多い。車の路と路をつなぐ小道にある山荘は変わらず静かである。今回も蓮江夫妻が先に行き、後から訪ねる形となった。夜はお喋り。□

7月21日(金)晴□

笹丸平の山荘から北八(キタヤツ)横岳の麓のピラタスロープウェイまではバスで二〇分もかからない。一昨年は来るまでもない悪天候だったが、去年はバスの終点まで来た。ロープウェイはすぐ雲に消えたので乗るのはやめた。今年はロープウェイが上っていくのが見える。迷うことなくのることにした。□

快晴ではなかったが終点からの展望は上等だった。二二四〇メートル、これは雁坂峠や立山の室堂に次ぐぐらいの、私にとっての登山記録である。高地にふさわしくハイマツが支配している。この頃から天候は我に味方をし始めた。木の芽の黄色が光る。□



ターミナル前面は視界が開け、小山を蟻の列のように人が連なって登り、下りしている。名前にピッタリの坪庭である。傾斜は体力の限界程度だが、久子夫人が一緒だから、□

自分の遅さに気兼ねがない。蟻の間に入る気持ちになる。□

林野が十分に手を入れてくれてあり、路に激しい起伏は少ないし、そんな所が続く場所には板が、しっかり、大都市の歩道なみにひいてある。足の引っ張り役の二人にさえ冗談がでる。去年、蓼科山から白樺湖まで下ったことを思うと、久子夫人の足の不安も遥かに少ない。私は平地を歩くのに不安は全く感じないが、田舎の路では、起伏の程度がいつも頭にある。何時の頃からこうなったか、膝の弱さより、呼吸を意識しだしてからのことだが、登った記憶が近ごろ大変少ない。ボルビドールの石段以来か。□

三〇分を一時間かけてまわっているうちに、八ヶ岳が見え始めた。ここが北八だというのが実感できる。ロープウェイを降りる頃、全容が現われた。乗務の青年に山の名を尋ねる。すぐ忘れるのだが、知っている名に出会うと、新しい角度から崇拜する山々に新たな畏敬の気持ちを抱く。彼はこの景観をこよなく愛しているのがわかり、これが季節で違う姿をみせるのを、具体的に話してくれる。熱海の暮らして思ったことだが、自然の話は季節を抜きでは出来ないのだ。□

都会の話は天候だけを気にすればいい。□

バス停車場まで来て昼を食べる。ここは極めて凡俗だが、今日は光が強さも角度も程よく、蓼科山の容も、八（ヤツ）が引く裾野も、その最前の姿を浮き彫りにさせる。□

午後まで山にいて、三時頃別荘に戻る。蓮江はまだ連れていってくれそうだったが、これで十分である。□



岡本山荘は地の利をえているだけでなく、庵主の趣味か、二階の居住性がよい。二面から緑が目に入る。道路からの高さが程よいせいか、二階にいる程の高さを感じられない。一人耳を澄ましせば鳥のさえずりや蝉の声だけでなく、エンジン音も入ってくるが、□

こ □には自然との一体感が十分にある。三年目で遠慮の仕方がわかったせいか、別荘を楽しむ余裕も出来たらしい。□

7月22日（土）晴□

蓼科牧場へ行く。今日は快晴である。バス停からの蓼科山の威容も見事だが、リフトであがった山頂からの景色は格別だ。女神湖が眼下にある。遠く浅間へ連なる山々は信州である事以外、格別の姿をみとめないが、ここが蓼科山（二五三〇メートル）

の山頂に近いだけあった、視界の高さが全てに秀る。□

御泉水自然公園に入る。ここは自然のままに近い植物園で、通路は整備されているから、自然観賞には格好の地ではある。高山といえようが、咲いている花もあり、ウスユキソウとあった。でも名の表示だけが目立ち、花はなく、自然公園はこれを売り物とはできないだろう。



う。どこでもこんな状態だが、お客は咲いている花を見付けて喜んでいるから、まあいい。自然は人を心豊にしてくれるのだ。□

散歩路が完備している。カラマツ林だが、青年期だろうか、木々に落ち着きがあり、散策を楽しませる。サ



ルオカゼという綿のような草が枯れ枝に巻き付いていた。□

ロープウェイの落下点は平凡そのもので、景色も牧場以外に何も無い。牧場さえ、山羊と



牛が一〇匹程度で、見物にはならない。のんびりとさせてはくれるが、落ち着くところも少なく、食事したら、時間が過ぎにくい。この頃から、景が清瀬からバイクでくるので、安全が気になりだす。ときどき携帯に電話を試みるが、通じない。通じない筈はないと、そろそろ思いだした。する

と安全が気になる。一〇〇キロを越える旅である。二時をすぎるところ連絡がとれた。瞬間、安心とともに、声の元気なさに気付いた。□

途中でパンクが起きたとか、下仁田で二時間が修理に使われたらしい。もう滝の近くにきているとのこと、笹丸平にくるよう言う。□

久子夫人の体調が崩れ、帰ろうということになって蓮江が車を探してくる。

運転手のお喋りを楽しく面白く聞きながら、気が付いたら笹丸平で景がいた。無事で何よりという所だろう。遭遇時間は三時だった。蓼科に入ってから、回転時車を倒しブレーキのレバーが折ったそうだ。この修理も大変だろう。□

7月23日(日)晴□

とうとう晴が続いた。今日は何もしない。景を送りだし、無事を祈った。



午前に記帳させられ小文を要求された。少し場違いだったかも

しれないが、七〇歳という年を考えると単純なことも書けず、「静けさとの対話」という随想にした。八百字はあったろう。どんな感じを庵主は抱くか。□

帰路の運転手は紳士だった。山を愛する人がこの地に落着いて、運転で生計を支え、登山をし、道案内に喜びを見付けている。そんな人生のようだ。生きていくのに強い人なのだろう。若い時には考えない生き方ではなかったが、それが具体的にどう実現していくか、都会暮らしにはわからない。これは山が単に憧れの対象だった自分程度の人間のいうことで、青年期以後。毎月のように都会を離れて山で暮らせば、自ずと生き方が見えてくるのかも知れない。遠く八ヶ岳が見えるなか、四時半の列車で茅野を離れ帰京、景は無事に帰っていた。

